

そして震災が忘却されつつあることへの危惧が語られる。その意味でも、立ち止まることなく考え続ける末木氏の、より完成した「真如の哲学」が登場してくる日に期待したい。

付記

ちなみに、本書の巻末「参考文献」にはビックアップされていないが、草木を有情（人間）と同じ成仏の主体と捉える草木成仏論に、豊かな他者表象・自然への想像力という視座からアプローチしたものに北條勝貴氏「草木成仏論と他者表象の力」（長町裕司他編『人間の尊厳を問い直す』上智大学、二〇一一年）がある。また北条氏には、具体的な神話や神社縁起説話を分析し、人外（動物）へのポジショニングやヒト中心主義の相対化をめぐる諸論稿もある。末木氏と北條氏の立場は容易には交わらないのかもしれない。しかし本書を、他者性の根源たる真如の哲学へ向けた原理論とすれば、他者（自然）が如何に物語られるかを分析し、その担い手の存在にも切り込んでゆく具体論である北條氏の一連の研究は、有効な相補性を持つとも言えよう。

（金城学院大学准教授）

井上泰至著

『近世刊行軍書論——教訓・娯楽・考証』

（笠間書院・二〇一四年）

小川 和也

——なぜ軍書は研究されなかったのか？

本書の「おわりに」に、「刊行軍書はその外縁たる、歴史と文学の境界」にある、と述べられているように、軍書は日本文学と歴史学の研究対象である。が、ここでは歴史学の立場から評したことを、あらかじめお断りしておく。

ひとつのエピソードから始めよう。

四年ほど前、北海道の大学に勤務していたとき、マイクロバスで学生たちと日高地方の平取町ひらけち二風谷にふたにを訪れた。二風谷地区は沙流川沿いの山間部であった。そこはアイヌ民族の「聖地」である。かつて、アイヌの儀礼に重要な沙流川のダム建設には反対運動が起こった。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館と萱野茂二風谷アイヌ資料館を見学、その後、バスに乗り移動、ほどかい義経神社に向かった。アイヌの聖地と義経神社。一見、なんの関係もないようだが、実はそうではない。この神社は、源義経が衣川の合戦

で死なずに蝦夷に渡ったという義経伝説にもとづく。寛政十年（一七九八）に蝦夷探索にきた近藤重蔵が、アイヌの祖先神とされるオキクルミと義経を、いわば習合させて創建したといわれている。

いったい、義経伝説はどのように普及したのかといえ、それは軍書による。義経伝説の初出は、寛文十年（一六七〇）に完成した『本朝通鑑』に「俗伝」として掲載されたものだが、急速に広がるのは、元禄期以降に刊行された、『残太平記』『本朝武家高名記』『本朝武家評林』『義経記評判』『義経興廃記』『義経勲功記』『源氏一統志』などの軍書による。さらに、享保期の軍書『鎌倉実記』では、義経は蝦夷から大陸に渡る。義経が成吉思汗になったという伝説は、遙かな後年、大日本帝国の大陸侵出の喧伝に動員された（三章四節。なお、菊池勇夫「義経「蝦夷征伐」物語の生誕と機能」『史苑』四二―一・二、一九八三も参照）。

これは一例にすぎないが、かくも近世軍書が日本社会に与えた影響は大きく、その射程は長い。にもかかわらず、歴史学、あるいは思想史では、ほとんど研究対象にされてこなかった。それはなぜか。本書では、その原因は、娯楽、教訓、歴史、軍学という「諸要素が渾然」としており、一次史料としての価値がなく、見るべきものがない、「継子扱いされるべき性格のものだった」からである、という（「はじめに」）。つまるところ、軍書の通俗性が問題であった。

歴史学においては、もうひとつ別の事情があった。歴史学における軍書研究の濫觴は、若尾政希の「太平記読み」、『太平記評判秘伝理尽鈔』の研究であろう。従来の思想史は、儒学者のテキスト分析という狭い土俵に集中していた。それに対して『太平記評判秘伝理尽鈔』という軍書を対象とし、その受容・普及性に着目することで、近世日本社会を覆う政治常識・社会通念を明らかにした（『太平記読み』の時代）平凡社選書、一九九九。若尾によれば、戦後歴史学において、『太平記』研究が忌避されたのは、通俗性にくわえて、『太平記』と楠木正成を皇国史観のなかでもてはやされた物語と英雄であるとして、全面否定したことによる（『太平記』は尊皇の書か？「歴史評論」七四〇、二〇一一）。つまり、天皇制軍国主義からの解放は、『太平記』に象徴される軍書一般の否定とつながっていた。

近世で最初に刊行された軍書『大坂物語』の「天下泰平、国家安穩」という思想性に注目したのは、横田冬彦である。この軍書は冒頭で、「静かなる世は文をもつてし、乱れたる国を武を以す」、つまり、武の時代が終わり、文の時代が到来したことを告げる。そして、「訴訟ある者ども、直訴をとげ、上聞に達しかば、たちまち憲法のともし火をか、げ、愁嘆の闇を晴らす」という。実際に、徳川家康は將軍就任直後の慶長八年（一六〇三）三月の郷村令で、直訴を奨励していた。横田が著した『日本の歴史一六 天下泰平』（講談社、二〇〇二）は『大坂物語』から始まる。近世の通史が軍書から書き起こされているこ

と自体、新鮮である。

日本文学においては、中村幸彦らの先駆的な研究や、個別近世軍書の研究蓄積がある。歴史学においても、ようやく軍書に対するまなざしが変化してきた。しかし、膨大な数が流通した近世軍書の全体像は、依然としてヴェールにつつまれたままであった。そこに本書が出現した。

二 軍書の森をみわたす

本書の目的は、近世軍書の「全体像」を明らかにすることである。これまで、近世軍書という森の全体像を示す地図はなかった。木を見て森をみず。本書によって、初めて個々の軍書＝木を、森のなかに位置づけることが可能になった。画期的なことではないか。

対象となる近世軍書は、一六〇〇年前後の慶長・元和期から、享保期ごろまでの刊本である。『和漢書籍目録』の「軍書」、および、『和漢軍書要覧』を基に、全一三二点の「近世刊行軍書年表稿」を掲げる（一章二節）。享保期ごろの刊本で区切りをつけたのは、享保七年（一七二二）の出版統制令により、武家の祖先に関する刊本が禁止され、軍書が下火になるからであるという。

なぜ刊本なのか。

軍書は史書の側面をもつ。江戸時代は身分制社会であり、文化にも階層差があった。文化の「雅」は伝統であり、「俗」は

新興である。岩波書店の〈日本思想大系〉に収録されている史書は、「雅」に属する写本で「俗」な刊本ではない。しかし、当時、史書といえば、「俗」な軍書であり、その多くは刊本であった（一章一節）。

通俗性を示す例として、山本蕉逸の『童子通』が引かれている。『童子通』は軍書ではなく、学問の初歩的な知識を説くもので、近世後期に広く普及した。そのなかに、「神皇正統記ヲ始トシテ、前後太平記ヨリ太閤記、三河記等ヲ読ベシ」という一節がある。このうち、『三河記』は徳川家の事績を記したもので、将軍家に憚りがあり、この本のみ刊行されなかったが、武家の歴史の大意を知るには軍書を読むべきである、と推奨している。

一般に通俗性は普及性・大衆性とながっている。近世の出版文化の意義は、書物が刊行されることにより、同じ情報が大量に社会に流通し、共有された知識によって、社会が変容するところにある。したがって、軍書においても、刊本の通俗性意義がある。

本書は、近世軍書を四つの時期に区分する（一章一節）。

①刊本以前、戦乱の収まらぬ永祿から慶長期に私的な記録として、家の功績を書き記したもので、写本で伝来する。

②大坂の陣以降、徳川の「平和」による支配体制の成立期の刊本。①の性格を引き継ぎながら、他方、戦闘集団であった武士団が、戦がなくなり、治者としての相貌を帯びるのに対応し、

仁政を説く。山鹿素行の兵学が治世の心構えを説きながら普及するのとも対応する。この時期を代表するのは、『太平記評判秘伝理尽鈔』と『甲陽軍鑑』である。①②は戦国時代から近世への過渡的な性格をもつ。

③將軍でいえば四代・徳川家綱以降、幕藩体制が盤石のものになる時期。延宝三年（一六七五）刊『北条九代記』を嚆矢とし、『太平記』以前と以後の時代を扱う軍書が続々刊行される。武家の歴史が通史化されていく。戦国は遠くなりけり。著者も読者も戦争を知らずに育った世代の軍書は、「長篇歴史読み物」の性格を帯びる。

④それまで歴史・教訓・軍事・娯楽の要素が雑居・混在していた軍書が、『太平記』に文献批判を加えた水戸史学の時代考証インパクトを受け、それぞれの性格を特化し始める。たとえば、娯楽性に特化したものとして、『朝鮮太平記』『北国太平記』などの馬場信意の長篇が代表する。教訓性を強めたものとして、『武家感状記』など、それまでの軍書から名将の言行録を抜粋した本が登場する。この時期は軍書の解体期であり、享保の出版統制令をうけて影を潜め、代わって、本格的な歴史小説として上田秋成の『雨月物語』のような「読本」が生まれる、という見通しを示す。

近世軍書から何がみえてくるか。評者の関心から、興味深かった点を列挙したい。

近世軍書には、軍学者が関与している。その多くが小瀬甫庵、

安藤掃雲軒、小幡景憲などの浪人であった。彼等はそれぞれの流派の兵学・軍学で一家を構え、その諸流によつて歴史観が異なる。また、浪人は大名家に召し抱えられることを目指す。大名家の求めに応じて軍学や戦史を論じ、叙述した。つまり、彼らの著作を通じて、領主層が何を考えていたのかを探ることができる（一章一節）。

本書の「近世刊行軍書年表稿」をみて気づくことは、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康など天下の覇者の成功物語だけではなく、『浅井物語』『石田軍記』『明智軍記』など敗軍の将を主人公としたものが少なくないことである。悲劇の敗軍の将の最大の英雄の一人は、『太平記』の楠木正成、もう一人は『義経記評判』『義経勲功記』などの源義経であろう。

「良将は戦はずして勝つ」という『太平記』の命題がある。にもかかわらず、なぜ正成は戦い、敗れたのか。そこで焦点となるのが、建武の新政の後醍醐天皇である。天皇は万里小路（藤原）藤房に、「今大乱の後、民費え人苦しみて、天下いまだ安からざるに、人主の誤を正すべき執政もなく、群臣言に阿（あやふ）つて、国の危きことを申さず……」と批判される（三章五節）。藤房と正成は、仁政を貫徹させるべく、天皇に対する諫言の臣として立ち現れる。もう一人の英雄・義経は蝦夷にわたるが、それは、蝦夷「征伐」の色彩を帯び、アイヌなど異民族支配の論理が盛り込まれていく（同）。

軍書の最大の作家は、十四点の作品をもつ馬場信意であった。

本書では、『朝鮮太平記』を取りあげる。この軍書は、『太閤記』『豊臣秀吉譜』『朝鮮征伐記』『清正記』などの軍書と朝鮮の柳成龍の『懲愆録』に取材し、編纂したものである。そこに、近世日本の対外認識と自国意識を探る。信意の場合は、日本の武威の強調、神功皇后の「三韓征討」、神国意識など、いわゆる「日本型華夷観念」が現れている、という（三章一節）。

信意は序文でほとんど常に、自作が「史実」であることを強調している、という。そう断らねばならぬのはなぜか。信意が活動し始める宝永ころ、軍書は虚構性を強め読本前史を飾るものと、史料を比較検討し史実を追求するものに分化してゆく。信意はその分岐点に立っているようにみえる。

三 課題と展望

近世刊行軍書の全体像に迫る本書の企みは、成功している。

本書は、軍書の作者の立場、あるいは、テキストの成立過程を追ったものである。次に、読書・読者を重視する書物研究の立場からすると、それらがどう読まれたのか、という観点からの追求が必要となる。その点を明らかにすることで、軍書が近世社会にあたえた影響を明らかにすることができる。

近世人の関心は武家から民衆まで、近世に成立した「家」を没落させることなく、繁栄させていくところにあった。刊行軍書の通俗性からすれば、民衆がどう読んだのかは一つのテーマとなるだろう。彼らは、たとえば甲斐国の依田長安のように、

士豪の系譜を引く家の由緒書をつくりながら、軍書から教訓を引き出していた（横田冬彦「牢人百姓」依田長安の読書）『一橋論叢』一三四—四、二〇〇五。

本書の対象は、正確には近世刊行和軍書である。本書一四頁には、『和漢軍書要覧』の上巻、すなわち和軍書のみが掲げられている。下巻は、『通俗十二朝軍談』『通俗呉越軍談』『通俗三国志』など、刊行軍書の特徴である「通俗」という言葉を冠した「唐軍書」＝漢軍書目録である。本書では漢軍書が省かれた理由は記されていない。

実は、先に示した『童子通』の引用箇所は、「王代武家ノ事、迹アラ／＼知タル上ニテ、唐山ノ通俗本ヲミルベシ、十二朝グン談ヨリ初メ、明清闕記、並ニ水滸伝マデヲ涉獵スベシ、尤正史トハ相違セシ事アレドモ、大意ヲ知ルニ足レリ」という一文が続く。「唐山」とは漢土・中国のことで、つまり、和漢軍書は一連のものとして考えられている。『和漢軍書要覧』上巻の第一書は、『日本王代一覽』である。この本は神武天皇から正親町天皇までの一〇七代の天皇の年代記である。なぜ、天皇の年代記が必要なのか。たとえば、『和漢軍書要覧』下巻の漢軍書の解説では、『通俗三国志』は「日本人皇十四主仲哀天皇ヨリ十五主神功皇后ノ治世マテニアタル」、『通俗統三国志』は「十六主応神天皇ヨリ十七主孝徳天皇ノ治世マテニアタル」というように、中国の歴史と天皇の年代とを重ねているが、これは何を示すのか。

本書第三章一節で述べられているように、日本人の歴史観は、一面で武威・神国観念・日本型華夷・皇統、つまりナショナリズムにつながると同時に、一面で中国の歴史にも通じており、日本・中国・印度の多元的な世界観（ここでは日本は相対化される）とが併存していた。近世人の歴史観において、ナショナリズムと多元的な世界観は、どのように関連し、どのような構造にあったのであろうか。

また、本書では、『寛永諸家系図伝』といった大名家の家譜編纂によって撃発された歴史意識と軍書の関連が明らかにされているが、近世中後期以降、各大家家では、藩祖や中興の祖を明君とした「明君録」が作為される。「明君録」は、虚実が混ざった歴史性・物語性を持ち、仁政と武威を強調する。その性格は、軍書の世界に通じているように思われるが、どうであろうか。本書によって刺激され、妄想はやむことがない……。

「あとがき」によれば、本書が刊行されるまで、十数年の歳月が流れている。本書はその歳月に見合う規模と興行きを備えている。軍書は、通俗性があるにもかかわらず、ではなく、通俗性を持つがゆえに、社会に与えた影響は大きい。その影響は、近世にとどまらず、近現代に及ぶのではないか。本書は、日本人の歴史観と歴史意識を解明する手がかりを示しているようにおもわれる。今後、この地図を手に、軍書の森に分け入る歴史研究者が増えることを期待したい。

（中京大学教授）

高野秀晴著

『教化に臨む近世学問——石門心学の立場』

（ペリカン社・二〇一五年）

相原 耕作

—
著者は既に石門心学に関する論考をいくつも手がけている。但し、本書はそれとは独立の一大論文であり、博士論文「一八世紀日本における民衆教化の展開と学問への視線——石門心学を中心に」（京都大学大学院教育学研究科）に大幅に加筆・修正を施したものである。

著者の研究の特徴は、自明の前提を疑うことである。例えば、石門心学の「創始者」は石田梅岩なのか。著者は、手島堵庵が梅岩の教えを「創始者」の教えとして語ることによって石門心学を創出したという（手島堵庵による石門心学の創出『日本思想史学』三五、二〇〇三年）。石門心学は幕末には門人組織内の統制力が弱くなり衰退したという通説に対しては、統制力が及ばないほど門人組織外で石門心学が普及した可能性を指摘する（石門心学における教化統制力とその圏外——石川謙『石門心学史の研究』の再検討『季刊日本思想史』六五、二〇〇四年）。口頭で